
偽の仮面ライダー G

成島信行

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

偽の仮面ライダーG

【Nコード】

N0200G

【作者名】

成島信行

【あらすじ】

この物語にあらすじはありません。

「仮面ライダーG」とは？

イラストとかも併せると、公式作品に関わるのも不可能ではないので、公式作品では絶対にやらないような作品を「G」はこうしてほしかったという物語です。

「仮面ライダーG」とは？

「仮面ライダーガイア」の頭文字のみの記載や、

「仮面ライダーアギト」のG3シリーズでも、同様の表記となるが、作品としての

「仮面ライダーG」とは、1月31日の1日限り放送される特別な番組。使用されるGとはその作品内で仮面ライダーに変身する稲垣吾郎演じる吾郎の頭文字からである。平成10作品目の

「ディケイド」を始め、それまでの平成ライダーも登場する。

ただし、今回はそれとは全く別の物語。

処刑

「私は何故、生きている？」

□ かつて、シヨツカーという悪の組織が存在した。

□ シヨツカーは、仮面ライダー1号と仮面ライダー2号によって壊滅し、その後を継いだゲルシヨツカーも壊滅した。

そして、シヨツカーとゲルシヨツカーを再編成したデストロンが誕生する。

□ ハサミジャガーとカメバズーカによる東京都壊滅作戦を阻止するため、1号と2号は洋上でカメバズーカとともに爆発した。

□ デストロンは、1号と2号が改造した仮面ライダーV3と戦っていくこととなる。

□ ここまでなら、他の多くの平行世界でも見られた。

□ この世界では、ここからが違った。

□ 1号と2号が死亡したと勘違いしたヨロイ元帥が、功を焦り、就任要請も出ないままV3抹殺に乗り出す。

□ ヨロイ元帥は、部族を増やすために、V3の親友であった高木裕介をガルマジロンへと改造する。

□ ガルマジロンとともにV3を退避させることに成功したヨロイ元帥であったが、首領から渡されたのは死であった。

□ 首領はヨロイ元帥を爆破しようとするが、甲羅崩しで逃亡を謀る。
□ ヨロイ元帥は、どこにいるかもわからない首領の存在に怯え、次の作戦のために用意していた数百ものプルトンロケットを使い、日本のデストロン基地を重点的に、世界の主要都市を壊滅させる世界壊滅作戦に出た。

□ 彼に首領の声が聞こえなくなったのはそれからだった。

□ 彼は、チベットの幹部養成学校にいたが、生き残ったのは彼だけであつた。

「私は何故、生きている？」

□ まだ改造されてない彼だけが何故生き残ったのかはわからなかった。

□ 彼は、自分の神であつた首領を殺したヨロイ元帥を殺すために旅に出た。

悪魔の世界

「私は何故、生きている？」

□ 彼はヨロイ元帥を探索するため、日本を訪れる。

□ ちょうどその頃、V3や仲間が心配になっていた1号と2号が傷つきながらも祖国へ帰っていた。

□ テレパシー能力のあるはずのV3からの連絡が途絶えていたのだ

□ 1号と2号は、僅かな望みをかけ日本へ戻るが、V3はヨロイ元帥とガルマジロンの攻撃から退避後、プルトンロケットの爆発に巻き込まれ死んでしまっていた。 □ そして、V3を捜しに立花藤兵衛のもとへ来た1号と2号は、意外な人物からその事実を聞かされる。

「 1号 2号 生きていたのか！！ 」

「 貴様が、ヨロイ元帥か！ 」

「 ほう 俺の名前を知っているとは光栄だ。 V3とともに死

後の世界でも俺の名を伝えてくれ 」

「 やはり、V3は 」

「 俺が殺した。 」

「 よくも！ 」

「 立花藤兵衛搜索のためにデストロン怪人を用意しておいてよかった 」

□ 少年ライダー隊の基地から、ガルマジロンやミサイルヤモリやユキオオカミやコダムササビが現れる。

「 バカな デストロンは壊滅したはず 」 「 俺が壊滅させた首領亡き今 こやつらの頭は俺だ 」

□ 1号と2号は、怪人たちの攻撃の前に倒れていった。

- 彼が倒れたのもそのときだった。
- 生身の体で、プルトンロケットによる放射線を多量に浴びた彼は限界が近付いていた。
- 世界中に放射能が飛び交う悪夢のような世界で彼は倒れた。
「私は何故、生きている？ だが、これで死ねる。」
- 彼は静かに目を閉じた。

「偽の仮面ライダーG」について 1

「偽の仮面ライダーG」について

まず、何故わざわざ、まだ始まってもない

「仮面ライダーG」を元にしたのか？

これは、簡単な理由なのですが、1つは

「仮面ライダーG」や

「仮面ライダーディケイド」の宣伝に繋がるため。もう一つの理由は、ストーリーや登場人物などは

「仮面ライダーG」とも関係なく、ネタバレという事態も無いため。

元を

「仮面ライダーシリーズ」としている通り、

「仮面ライダーG」ではなく、

「仮面ライダーシリーズ」全てが元です。権利関係もありますが、本当に

「祭」とするなら、これくらいはやっておきたいという考えから来た作品です。

「仮面ライダーディケイド」で描かれるのが、『クウガの世界』『アギトの世界』『龍騎の世界』『555の世界』『剣の世界』『響鬼の世界』『カブトの世界』『電王の世界』『キバの世界』そして、『ディケイドの世界』であるなら

1話限りの

「仮面ライダーG」でくらい『仮面の世界』を描いてもいいのではないかと

もちろん、すでに注目度高めですし、やはり、石ノ森先生が関わってない作品と繋げるのは抵抗があるでしょうが

まあ、今の

「仮面ライダーシリーズ」には、様々な事情で、同じ平行世界ものをすでにいくつか制作している
「ウルトラシリーズ」ほどの自由が無いので。

せめて、この

「偽の仮面ライダーG」だけでも、平成と昭和の融合を。

さて、その場合、

「G」をどうするか
本物の

「仮面ライダーG」と同じ様に、吾郎から取ることできましたが

第1案 早瀬五郎

□ 早瀬五郎の洗脳が解け、さそり男でありながら、仮面ライダー2号として（本郷に対しては仮面ライダーのライバルとして）、主人公にする。

□ 2号編との差を付けるために、また

「仮面ライダーカブト」も意識して洗脳が完全には抜けきっていない善と悪の間を生き、最後はさそり男のときよりも心苦しさを見せる1号の手で

□ 1号の手でやっちゃったら、平成と繋がる前に終わるので、没に。
第2案 吾郎

□ いっそ仮面ライダー誕生を平成に持ち込むという案。

□ 平行世界には必ず、かつて少年ライダー隊で仮面ライダーを知る五郎がいるという設定から始まり、

□ 『クウガの世界』では、G1としてクウガと共闘する吾郎

□ 『アギトの世界』では、エルロードから力を得た仮面ライダーガライとしてアギトと戦う吾郎

□ など、様々な世界の吾郎を描き、最後にその力が『仮面の世界』に収束し、10人ライダーは吾郎の暴走を止めるために共闘。結局、吾郎の中の仮面ライダーへの思いが制御となる。

□ 平成と昭和の融合はできてるのですが、

「ディケイド」がそういう側面を持つため、没に。

第3案 沼田五郎

□ ブラックサタンが改造に成功。協力者として、城茂も登場。

□

「偽の天敵」も同じく

「仮面ライダーストロンガー」を扱っているため、没に。それに、五郎生かそうと思うとタックルと茂の死は必須になるので。

と、難航の末の作品です。他の没案については、次回に書きます。

キメラニュース

「私は何故、生きている？」

□彼にもついに体力の限界が来てしまう。

□彼は目を閉じた。

□しかし、いつまで待っても、彼は死ななかった。

□彼が不思議に思って目を開けると、彼は手術台の上にいた。

□デストロン いや、ショッカーにも劣るその設備に、彼は自分がどこにいるのかもわからなかった。

「都市伝説でも何でもいい 今こそが、仮面ライダーが必要なんだ」

「□彼の朦朧としていた意識は、その言葉で覚醒する。

□幹部養成学校で聞いてきた名 敵として教えてきた名であった。

□だが、その名が彼を蘇らせた。

「私は？」

「気付いたか！意識が戻れば、もう大丈夫だろう 待て すぐに手術は終わる 運がよかった 君はもう少しで死ぬところだったんだ」

「私は何故、生きている？ もう私に生きている必要など無い」

「何を言っている！？生きる必要の無い人間などいない 私の息子の分まで君は生きろ！」

□そのとき、巨大な震動が手術室を襲った。

「生体反応があるかと思えば、やはり、神教授あなたでしたか」

□手術室にタキシード姿の男が入ってくる。

「デストロンめ こんなところまで」

「デストロン」

「あなたは素晴らしい技術を持っていますが、あなたのような人間は今のデストロンには必要無い」

□ 巨大なキバのようなヤリが神教授を貫く

「今のデストロンだと？」

「よせ、君の手術はまだ終わってない！」

「SET」

□ 彼の体は、一瞬銀色に変わったが、すぐに元に戻った。

「神教授　我々はあなたを過大評価していたようだ　こんな出来損ないなど」

□ ビリ。

□ 何かが敗れる音がした。

□ タキシードの男は、それを破りながら、象へと変わっていく

「吸血マンモス　幹部養成学校の資料で見たことがある。」

「幹部養成学校だと　まさか」

「デストロンの資料にはお前の弱点までしっかりと書いてあった」

□ 彼は、ベルトから剣を抜き、それを吸血マンモスのある場所へ刺し込んだ。

「私が仮面ライダーか　面白い。確かに、こんなデストロンなら無い方がいい。」

ナチスの子

「私は何故、生きている？」

□ 彼は、吸血マンモスを殺し、神教授と吸血マンモスの死体を手術室から出した。

□ 外に出た彼は、そこが移動要塞の中であつたことを知る。

「この中にいたから、この男は この男も生き残ったことを悔やんでいたらしい」

□ 無数のコウモリたちが息を潜め、それを眺めていた。

□ 彼は、2つの死体を外に埋めると、その移動要塞を動かし始めた。

□ その起動とともに、彼は背後から襲われる。

「クツ もう一人いたのか」

「デストロンがダブルライダーを警戒し、二体での作戦実行をやっていたことは知っているだろう？」

「しまった！」

「 正式な幹部候補というのに、あまり計画性はないのだな

ドクトルGよ 」

「何故、それを」

「デストロンの者なら誰でも知る名だ。死神博士と同等の手術の腕を持ち、ゾル大佐と同じ采配のできる男なのだろ？まさに、ナチスの子だ！ ドクトルG、デストロンに還れ！」

「首領のいないデストロンに戻る気はない！」

「フ 大口を叩きおって 中途半端な改造で終わっておるくせ

に！この出来損ないめが」

「死人コウモリか」

□ドクトルGは、ベルトから剣を抜き戦うが、それが当たることはなかった。

「諦めて、デストロンに還れ！」

「悪いが、デストロンは潰す。俺は仮面ライダーだからな！」

□そのとき、死人コウモリの翼を部屋から出るアームが捕らえた。

「こんな仕掛けを用意していたのか！」

「私だ！」

「その声は神教授！生きていたのか！」

『これは私のデータを入れた神ステーションの声だ。悪いが、

君がデストロン関係者と知り、見定めさせてもらっていた。

多くは望まない。デストロンを倒してくれるというのなら、力になるう。」

「フ 私と吸血マンモス 二度の爆発に耐えられるほど丈夫には見えんがな」

『この施設だけで彼が助かるのなら』

「クッ」

□ドクトルGは、剣で死人コウモリの体を真っ二つにした。

□ドォーン。

□ ドォーン。

□ 死人コウモリが爆発し、施設内の機器も誘発していく。

『ここも終わりだ。早くここを出ろ！』

□ドクトルGはそこを脱出し、神ステーションはその姿を海へと消した。

「偽の仮面ライダーG」について 2

吾郎Ⅱ新キカイダー案

1号が緑川博士と脱出に成功した世界。

緑川のバックアップのある1号と2号の活躍で悪の組織は全て壊滅。悪の組織が存在しないため、風見志郎がV3に改造されることはなく、サブローの名を付けられた人造人間がハカイダー（キカイダー破壊用人造人間）となることもなかった。

サブローは、完璧な良心回路を持つ人造人間キカイダー03として完成し、02や01も完璧な良心回路を装着し完成する。

キカイダー00で使われた緑川と光明寺が知人という案を使わせてもらい、キカイダー3体のお披露目に緑川も正体される。

光明寺は緑川が話した仮面ライダーの改良型ビクトリーの制作をしなくなり、緑川とともに制作。シローことキカイダー04（通称ビクトリー4、もしくはV4）が完成する。

そして、緑川と光明寺は、仮面ライダーとキカイダーの利点を集めたキカイダー05ことゴローを完成させる。

だが、その良心回路は完璧すぎた。

キカイダー05は、自分の兄キカイダー00の末路を知る。

02が制作したそれではない本当のキカイダー00は、不完全な良心回路を付けられ、その出来の悪さから、人間でも人造人間でもないととしてコウモリ型に再改造されたことを

また、そのコウモリ00は、キカイダー3体の完成で必要なくなつたため、最期に自分を破壊する命令を出され、喜んでその命令を聞いたことを

キカイダー05は、人造人間を簡単に殺す光明寺博士や人を改造した緑川博士を悪として、それを殺す。

人を殺すことを正義と信じるキカイダー05は、自分のデータにあ

った正義の使者の称号仮面ライダーの名を自分に付ける。

緑川のサポートに頼っていたダブルライダーや良心回路のせいで兄弟も殺せないキカイダーをも、正義のためのやむを得ない犠牲として、彼はハカイする。

抵抗する力の無い人類にキカイダー05の牙が向けられる。

とここまで考えて、これはさすがに仮面ライダーじゃないと。せめて、本物の仮面ライダーGも改造人間なんだから、改造人間にしないと。

でも、上の破滅的なライダーは残したかったので、それに近い時期の吾郎やGを選んだ結果、Gに^{ゲー}。

G選んだんだし、タイトルを仮面ライダーGにしようかとも思いましたが、それだと、ネタバレになるので。

ドリルアーム

「私は何故、生きている？」

□ドクトルGは、ベルトから出るライドルだけで次々と怪人を倒していった。

□変身せずにそこまで戦えたのは、彼が怪人の弱点を知っていたからと、改造の際付けられた人工筋肉が優れていたからに他ならない。

□デストロンは、ドクトルGを殺すため、彼の知らない改造人間を投入する。

「貴様は 結城丈二！生きていたのか！？」

「お前に幹部としての在り方は教わった。それは感謝している。

だが、首領に仇なすものは殺す！ 変身！」

「その姿 イカデビルだと！？」

「そんな前組織の骨董品を選ぶとは ！」

「 尊敬する師が、変身した姿だ。古い型だが、俺にはこの姿がちょうどいい。カセットアーム！」

□結城丈二はイカデビル・サタンフォームに変身し、8つの足にカセットアームを装着していった。

「カセットアーム 完成したのか？」

「そういえば、貴様が幹部養成学校の士官だった頃に試作型を見せたことがあったな。」

「あれは失敗だったな 稼動だけで何千ボルトも必要とし、仮に電気人間に付けたとしても、電気人間にはすでに電気という武器がある。」

「だが、これは完成型だ！見てもらおう ドリルアーム！」

□ドリルアームがGの右腕を砕く。

「 試作品だが、私に見せた武器をもう一度使ったのは間違いだったな。」

「 右腕を犠牲にして、ドリルアームを止めたのか!？」

「 何を犠牲にしても、デストロンは壊滅させる。それが消えてしまった首領へのせめてもの御恩返しだ!」

「 首領が?」

「 俺は 　　　私は何故、生きている?」

赤い靴

「私は何故、生きている？」

□ドクトルGの斧がイカデビルの首を狙う。

「俺は 私は何故、生きている？そして、お前は何故、生きている？首領のいないこの世界で、お前は何のために生きる？」

「首領がいないだと？」

「お前の父なる首領は消えてしまった。」

「首領が だから、組織の壊滅を望んだのか」

「退け！ともにデストロンを壊滅させよう。」

「デストロンを」

『その男に退くことはできない。』

□デストロンエンブレムからヨロイ元帥の声が響き渡る。

「ヨロイ元帥！」

『首領は改造人間に意思を与えすぎた。改造人間の支配に必要なのは、従順さだ。』

□イカデビルの目が赤く光る。

「か、体が勝手に！」

「そうか やはり、今のデストロンに救いは無さそうだ」

□Gは、イカデビルの首を伐り落とした。

「カセットアームを全て付ければ、近中遠の全てに対応できるように見えるが、刀と同じで懐 最近距離と呼ばれる場所には対応できはしない。もう聞こえぬだろうが」

□Gがイカデビルの首を眺めていると、イカデビルの体が静かに起きあがり、Gの体にロープを巻く。

「まだ動くというのか！」

『爆破されるまで、お前を狙い続けるのだ!』

「ライダスラッシュ!」

□ Gのライドルに斬られ、イカデビルは爆発していった。

「ヨロイ元帥、聞いているか!? 私は必ず、貴様を殺し、デストロ
ンを壊滅させる。」

「第N号と平成第N作目」 1

「仮面ライダーディケイド」平成10作品目にして、平成ライダーが総登場する異色作。

平成作品は、「仮面ライダー」から「仮面ライダーZX」までしか知らない人には馴染みが薄いかもしいないが、実は平成9作のモデルは、「仮面ライダー」から「スーパー1」までの9人ライダーにある。

第1号と平成第1作目

□平成第1作目「クウガ」のコンセプトは、原点回帰 「アマゾン」「スカイライダー」「仮面ライダーブラック」「真・仮面ライダー」のやろうとした原点回帰 また、「クウガ」には他の平成作品と違い、クウガ以外にライダーは存在しない。持ち前の明るさからそうは見えないが、かつて1号が味わった自分が負ければ終わりという状況が見事に再現されている。

第2号と平成第2作目

□「アギト」のコンセプトは、神との戦い。これは「サイボーグ009」からである。「アギト」には、昔クウガがいたという設定があり、デザインも近いものになっている。2号もそうだったが、前のライダーとデザインが近いという事は、視聴者からすれば、どうしても前のライダーとの対比から始めてしまうこととなる。

第3号と平成第3作目

□「龍騎」のコンセプトは、ライダーバトルバトル。これは、漫画「仮面ライダー」を初めとするライダー同士の戦いを元になっている。ストーリーの要となるのが、復讐の意味の無さであり、それこそ「

V3」が目指したものである。また、悪の仮面ライダーが登場するなど、異色とされる「龍騎」であるが、デザイン上ではV3も十分に異色の存在だった。今でこそ正統派なデザインであるが、当時としては、異例のものであった。V3がいなかったら、アマゾンのデザインもストロンガーのデザインも受け入れられるはずがなかった。

四人の大幹部

「私は何故、生きている？」

□ Gは、基地の通信システムを破壊すると、カセットアームのデータを利用し、自身の医術で改造を始める。

□ 右腕にカセットアームを付け、改造を終えたGはついにデストロン基地本部に辿り着く。

「待っていたぞ！ドクトルG お前を討つために、わざわざこいつらを再生させたのだ！」

□ Gの前に4つの筒が現れる。

「彼らは――！」

「そう ショッカー・ゲルショッカーの大幹部たちだ！幹部候補だったお前にはちょうどいい相手だろう？」

「 彼らが貴様に従うとも思っているのか？」

「 結城丈二の末路を忘れたか？今のデストロンに、私に逆らう者などいないのだ！」

□ 筒の扉が開かれ、中から狼男、イカデビル、ガラガラダ、ヒルカメレオンの4体が飛び出してくる。

「クッ カセットアーム、パワーアーム！」

□ 狼男の首が飛び、爆破される。

「 そうだ。殺せ 殺してくれ！」

「 意思の無い戦闘など生きていく価値も無い！」

「 私が忠誠を誓ったのは、ショッカー首領だ！」

□ 言葉とは別に、怪人たちはGに容赦ない攻撃を仕掛ける。

□ イカデビルの触手が、Gを掴む。

「ゲーよ、大幹部の死に様、よく見て置け！」

□ Gは、イカデビルに手足を操られ、ガラガラランダにライダーがえしとライダーパンチを放ち、ヒルカメレオンにライダーキックを放った。

「馬鹿な 死神め、システムを破ったのか！」

「私だけじゃない 他の3人もシステムを少しはといていた。」

「馬鹿な」

「私もそう思うよ 考えるに、忠誠心の勝利 長年科学者をやってきたが、初めて自分で味わった奇跡だ！ さあ、私の番だ」

「

□ イカデビルはGを操り、自分にライダーきりもみシュートを喰らわせる。

「何故だ！何故、デストロンを裏切る？」

「流石に、そう何分もシステムから抵抗できそうもないのでな

それに、私は死神だ！死に方くらい自分で選ぶ！」

□ 狼男に続き、3人の幹部も死んでいった。

終わりと始まり

「私は何故、生きている？」

「馬鹿なやつらだ」

「ヨロイ元帥、残るは貴様一人だ！」

「そして、お前も馬鹿なやつだ　お前の戦闘は見ていた　カセツトアームも全て把握している。」

「馬鹿はお前だ　アックスアーム！」

「斧だど！？そんなカセツトアームは存在しないはず？」

「改造したのは、俺自身だ。」

□ヨロイ元帥の甲羅に斧が刺さった。

「せっかく再生した甲羅だったが仕方ない　甲羅崩し！」

「逃がすか！」

□Gは、ヨロイ元帥にライダーきりもみシュートを放つ。

「こんな技ごとき」

□ヨロイ元帥は空中に舞い、Gはそれを追うようにライダーキックを放った。

「ゲーきりもみキック！」

「馬鹿な」

「死の意味すらも考えられぬか」

「馬鹿な　馬鹿な　馬鹿な馬鹿な馬鹿な　私は首領だ　デストロンの首領だ！こんなもので終わるものか！！」

□ヨロイ元帥は死に際に何かを押した。

□ピーピー

□警報機が鳴り響く。

□基地内コンピューターの表示を見ると、全システム稼動と書かれ

ていた。

「貴様、何をした？」

「グフ　　グハハハハハ　グハッハハ　　グフハ！」

□だが、ヨロイ元帥は答えず爆死していった。

□ヨロイ元帥が押したそれは、怪人の意思を奪いGを狙い続けると
いうシステムと改造人間の製造場の起動スイッチだった。

□Gは、デストロンを壊滅させるため、今日も戦い続ける。

「第N号と平成第N作目」 2

第4号と平成第4作目

□「555」では、全ての仮面ライダーが強化服のライダーとなる。強化服は「アギト」でも使用されたが、強化服の持ち味として描かれるのは主に生身の人間のパワーアップであり、「ゴレンジャー」で描かれた強化服の装着者の変更などをそれほど重視していなかった。この「555」はそちらを重視しており、555の装着者ですら二転三転している。

第5号と平成第5作目

□「剣」は、人間だけの技術で力を手にしたライダーが主人公である。また、主人公は剣を武器にして戦うライダーであり、それ以前にもRXや555が剣を武器にしていたが、初めて剣を武器にしたのは、Xである。

第6号と平成第6作目

□「響鬼」のコンセプトは、異色のライダー。これは、「アマゾン」も目指したものであった。デザインや攻撃方法、全てにおいて異色を目指した作品であり、それゆえ、ライダー集合の際にも異彩を放つ作品である。

第7号と平成第7作目

□「カブト」の目指したものは、最強のライダー。かつて「ストロンガー」もそれを目指して制作された。結果としてRXというそれ以上の能力を持ったライダーが生まれてしまうが、当時としてはそこに最強のライダーが描かれていた。なお、どちらもモチーフがカブトムシであるが、これについては、最強のライダーを描くため、昆虫最強と考えられるカブトムシがモチーフとなったのが実際の理

由である。

第8号と平成第8作目

□「電王」のコンセプトは、成長するライダー。これは、スカイライダーもそうであった。スカイライダーの場合、それは7人ライダーとの特訓によって描かれ、電王では戦闘能力の向上もさることながら、主人公の心の成長が大事に描かれていくこととなる。

第9号と平成第9作目

□「キバ」と「スーパードラゴン」には一見何のつながりもないように見えるが、バーストモードという名称は元々、「スーパードラゴン」の初期案「V9」で、V9がスパイハンドとバーナーハンドを同時に使用するときに使われる名称であった。イクサがバージョンX（V10）・バージョンXI（V11）となったのは、それをV9の設定から取ったと示すためでもある。

伝説の目覚め

「私は何故、生きている？」

□ あれから何十年が経ったのか

□ この世界にはすでに人は存在せず、改造人間もGにそのほとんどが倒されていた。

□ Gは、次々と繰り出される怪人と世界各地で戦い続けていた。

□ インカの秘術を探り当てそれを使い改造し、ソビエト連邦で電気人間の改造人間を倒しその技術を使い再改造し、パリで重力遮滅装置の設計図を発見しそれを自身の体に作り上げ、アメリカで重力調節装置を見つけそれを装置し、古いショッカーのアジトで改造人間ZXの製造計画を見つけ、その設備を利用し、最後の改造を終えた。

□ 傷付き倒れる度に再改造を繰り返したGはすでに元の姿に戻ることにすら不可能にしていた。

「私は何故、生きている？」

□ そして、長い戦いがGに戦いの目的を失わせていた。

「この世界は？旅の途中、いくつかの世界を見たが 知らない別の世界がまだあったのか？」

「ここは？さつくまでレストランアギトにいたはずなのに！？」

「誰だ 貴様たちは？」

「 グロング じゃない？」

「 アンノウンでも無い 」

「だが、この世界の乱れ様は 超変身！」

「伝説の第4号!」

「いや 君たちの世界のクウガは俺じゃない。」
「俺のことを?」

「知っている。君たちの世界にも敵がいたことも。だが、俺は君たちの世界の住人じゃなかったたので、手は出さなかった。君たちなら何とかできると信じたから だが、この世界は 一緒に戦ってくれるか?」

「わかりました。」

「なるほど 仮面ライダーか 来い!」

総ての目覚め

「私は何故、生きている？」

「クッ　朝倉と戦っていたのに、ここは？」

「このジョーカーの力から人を守るためには、俺が人から離れる必要があるのに　ここはどこだ？」

□そこに、2人のライダーをかかえたGが現れる。

「私はライダーG　　さあ、ライダーバトルファイトを始めよう。」

□二人はカードを駆使して戦うが、一人はライドルの前に倒され、もう一人はきりもみライダーキックの力で倒されていった。

「ここは？俺はライオトルーパーに倒されたはずなのに」

「あれを追い掛けていたらとんでもない世界に来てしまった。」

□二人の前にはGが立っており、その間には4人のライダーが倒れていた。

「待ち兼ねたぞ　ライダー！」

□Gは有無を言わず、二人を襲ったが、二人は姿を消した。
「なるほど　加速というわけか　ならばこれでどうだ？」

□Gは周囲の重力を調節しながら、辺り一面に電気を放った。

「さあ、決めはこれだ　パワーアーム！」

「待て！」

□笛と音叉　二つの音色が響き渡る。

「そうか　別の場所に出ていたやつもいたのか」

「何が目的でこんな事を？」

「目的か　おそらくはラーイダを倒すためだろう。そう　この怪人たちを倒したのも、どこかで見ている首領に認められるため、最強の怪人こそが首領の望まれたもの　最強と認められれば、首領も出てきてくれるに違いない。」

「　その思いが世界をつなげたとも言つのか！」

「スキありだ　大切断！」

□ Gは、話に気をとられていた二人を切った。

破壊と再生

「私は何故、生きている？」

「そんなこと知るか！」

「貴様、いつの間に！」

「さっきから加速しながら見物させてもらっていた。この世界は俺も知らないが、ライドと戦いたいんだろ？相手になってやる。」

「加速だと！ならば！」

「馬鹿の一つ覚えか！言つたる？見ていたって こいつらは俺の知るあいっらじゃないようだが、気分が悪い。だが、正攻法じゃ無理ってこともよくわかった！」

□ そう言うと、Gの相手は、クロックアップにアクセルモードを重ね加速した。

「ライジングバーニングボンバー！」

□ Gの体が燃え上がっていく。

「クッ」

□ Gの相手はまた姿を変え、半身ずつ全く別の刀を持つ。

「ファイナルベント・ドラゴンライトニングスラッシュ！」

「グアー！」

□ Gは倒れた。

「まだだ 首領に！首領に認められなくては首領は帰ってこない！」

「こいつ まだ戦えるのか？」

「ZX 完成までは程遠いものだったが、その再生能力は完成されていた。その力見るがいい！」

□ Gの体が再生されていた。

「まずいな さっきのが全力だ」

□ そんなとき 突然、空から列車が現れる。

「おい あんたらの世界こんなところなのか？」

「いや、ここは違う世界だ！」

「おかしいですね。あなたがたの世界のあなたがたの時代に来たはずだったのですが、どこかで分岐を間違え、近い別の世界に来てしまったようです。」

「ここが俺たちの世界と近い世界！？むっ！危ない！」

「トウ！」

「あっ！一文字さん！本郷さん！」

「モモタロス、僕たちも！」

「オウ！」

「困りましたね。」

Gの世界

□ 列車から3人のライダーが降り立つ。

「今度は誰　　1号、それに、2号　　そうか、貴様ら生きていたのか　」

「俺たちを知っている!？」

「どうやら本当に近い世界らしいな!」

「一文字、やつのあの足!」

「　　!　　ZXと同じ!それにあの装置は　」

「吸収!?　それともただこういう改造されただけなのか?」

「わからないが、ここにいないところを見ると、RXたちはいない世界らしいな　」

「何ごちやごちややってやがる?やらないなら、俺が!」

「待ってくれ!ここが俺たちの世界に近い世界というならこれ以上君たちを巻き込むわけにはいかない!行くぞ、一文字!」

「ああ　ライダーダブルキック!」

「こんなものか　ダブルライダーの実力とは!？」

□ Gはダブルライダーの足を掴んだ。

「貴様、ドクトルGか?」

「そうだ!貴様たちを倒せば、首領も帰ってくるだろう。喰らえ、きりもみシュート!」

「クッ　」

□ Gは2人を投げようとしたが、目の前の地面に刺さった剣に目を取られ、動きを止めた。

「電王キーク!」

「グ!？」

「クウー。キック習っておいてよかったぜ!」

『先輩、キックなら僕に。』

「うるせー、カメこうが!」

俺も仮面ライダーの名をもらったん

だ　　だっ たらこう いう 場面を 見過ごす わけには いかねー だろうが
よ！ 1号、 2号！

□ 一人の 掛け声で、 3人が いっせいに ジャンプする。

「トリプル ライダー キック！」

「グアー！」

「私は何故、 生きている？」

「気が付いたか」

「1号　2号　他の ライダー たちは？」

「今、さっきの 列車が それぞれの 世界に 送り届けて いる。」

「そうか　　どうやら、 首領が 死んだこと 信じない ために 自分を 失
つて いたら しい。」

「　　G　　さっきの 列車を 使う 許しが 出れば、 この 世界を 変える
ことができる　　だが、 それは、 君の 人生を 消す ことになる。 本来
なら 人一人が 決められる ものではないが、 もはや この 世界の 人間で
生き残っている のは 君しか いない。 オーナー は 君に 判断を 託すべき
だと言っていた。」

「歴史を変えて 首領を？」

「そうだ」

「やめておこう。 今になって やつと わかった。 別の 世界から 呼び出
すことが 私くらいにも できるなら、 首領は もう やっている だろう。」

私は、 首領に見捨てられたのだ　　首領も 死んだ　　怪人も 死んだ

　　やつと デストロン が 壊滅したんだ。　　この 世界を 残させてく
れ！」

「わかった。」

□ ダブルライダーも列車に乗って去っていき、Gはその世界でたった一人のライダーとなった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0200g/>

偽の仮面ライダー G

2010年10月10日02時34分発行